

## 第3章

# ネパールにおける支援事業

## ■ インドとチベットに接する内陸国 ネパール

インドとチベットに国境を接する内陸国のネパールは国土が約15万km<sup>2</sup>で、約3,000万人の人々が住んでいます。その緯度は沖縄と同位置で亜熱帯に属していますが、北に標高8,000m級のヒマラヤの山々を戴いているため、標高差が大きく、その違いによって気候が大きく左右されます。その領土の東・西・南をインドに囲まれ、ヒマラヤの北には中国が占領中のチベット自治区があります。このため、政治・経済面においてこの両大国の影響を受けざるを得ない状況にあります。



### 《現在のネパール事情》

(2021年1月現在)

#### ● ネパール連邦民主共和国

1. 面積：14.7万km<sup>2</sup>
2. 人口：2,970万人 (2019年、アジア開発銀行)
3. 首都：カトマンズ
4. 民族：パルパテ・ヒンドゥー、マガル、タルー、タマン、ネワール等
5. 言語：ネパール語
6. 宗教：ヒンドゥー教徒 (81.3%)、仏教徒 (9.0%)、イスラム教徒 (4.4%)
7. 政体：連邦民主共和国
8. 通貨：ネパール・ルピー  
1ルピー＝約0.880円 (2019/2020年度平均値、ネパール中央銀行)  
1米ドル＝約116.31ルピー (2019/2020年度平均値、ネパール中央銀行)
9. 識字率：65.9% (2011年、国勢調査)
10. 主要産業：農林業、貿易・卸売業、交通・通信業
11. GDP (名目)：3兆7,568億ルピー (約323億ドル) (2019/2020年度、ネパール財務省)
12. 一人あたりGDP：126,196ルピー (約1,085ドル) (2019/2020年度、ネパール財務省)
13. 主要貿易品目：(1) 輸出：糸、ウール、カーペット、衣類、大豆油等  
(2) 輸入：工業製品、機械類、石油製品等  
(2019/2020年度、ネパール貿易輸出促進センター)
14. 主要貿易相手国：(1) 輸出：インド、米国、トルコ、ドイツ、英国  
(2) 輸入：インド、中国、アラブ首長国連邦、フランス、タイ、ベトナム  
(2017/2018年度、中央銀行)
15. 主要援助国 (DAC諸国のODA実績)：  
(1) 米国 (2) 英国 (3) 日本 (4) ドイツ (5) ノルウェー
16. 在留邦人数：1,124人 (2019年10月1日現在、海外在留邦人数調査統計)
17. 在日ネパール人数：96,824人 (2019年12月1日現在、法務省在留外国人統計)

## 【1】 「ティテパティよもぎの会」への支援

### ① 直接支援から間接支援に移行

麗澤海外開発協会は、1978(昭和53)年9月、中米コスタリカ共和国に現地法人レイタク・コスタリカ株式会社を設立、国際協力事業団の融資を得て「花卉栽培試験事業」を実施し、協会の設立目的である「対外経済協力及び技術援助」に貢献してきました。しかし、1991年をもって事業は終了しました。

コスタリカでは、コスタリカ国内に株式会社を設立し、日本から駐在員を派遣して会社を運営してきました。日本人がコスタリカ国内で花卉栽培事業を成功させたことにより、その成果と可能性をコスタリカの人々に伝えることに成功しました。しかし、企業を経営するには優秀な人材が必要不可欠であり、そのような人材をコスタリカで育成するには至りませんでした。

そこで当協会の「寄付行為」に則って新たな事業を実施するため、1992年10月1日付で「事業計画検討委員会」を設置しました。委員会による発展途上国に関する調査が、タイ、ラオス、ネパールにおいて実施され、これらの調査の結果、ネパールで活動する「ティテパティよもぎの会」が実施するプロジェクトへの支援が、事業として有望であるとされ、当協会の活動はこのネパールへの支援を機に「直接支援」から「間接支援」へと移っていきました。

#### 〈支援の内容〉

① 専門家の現地での指導に関する渡航費用・滞在費の支援



カトマンズにあるOTTC(東洋医学専門学校)の実習風景(1994年9月)



OTTCの日本語授業風景(1994年9月)



もぐさの原料となるネパール原生のよもぎ



乾季にとりこみ、もぐさを作るのは  
生徒たちの仕事



棒状にした灸（棒灸）



OTTCの授業風景（1994年3月）

## ② 研修生の受け入れ事業

現地ネパール人スタッフを定期的に日本へ招聘し、必要な技術の研修を受けさせる。

## ③ 技術者の派遣事業

現地の事業をアシストできる人材を派遣する。

## ④ 日本からのスタディツアーの実施。

### 〈これまでの主な支援活動〉

**1992年**・ネパール東洋医学専門学校(OTTC)を視察。支援活動内容を検討。

**1993年**・畑美奈栄氏を専門家として派遣する。

・ラムマニ・カティワダ氏を滋賀県のもぐさメーカー(株)山正への第1期研修生として日本へ招聘する。

**1994年**・イスワル・ラズ・バラミ氏を第2期研修生として(株)山正へ招聘する。

**1995年**・ネパール東洋医学専門学校の校舎増設を支援。

・同校の4階建校舎が完成する。

・国際協力事業団ヘティテパティよもぎの会へのシニア協力隊を要請し、認可される。

**1996年**・ネパール東洋医学専門学校の第1回卒業式が行われる。

・同校の卒業生に「モラロジー賞」を授与する。

**1997年**・イスワル・ラズ・バラミ氏を国内鍼灸院の研修生として日本へ招聘する。

**1998年**・麗澤大学外国語学部日本語学科卒業生・田中靖子を現地事務局スタッフとしてネパールへ派遣する。

・サヌ・ナニ・バラミ氏を国内鍼灸院への研修生として日本へ招聘する。

**2000年**・カジェンドラ・ビクラム・スヌワル氏を日本へ招聘。手技療法治療院で研修を受ける。

- 2001年** ・ビシャール・シュレスタ氏を日本へ招聘。手技療法治療院で研修を受ける。
- ・イスワル・ラズ・バラミ氏およびデネッシュマン・ラケ氏を日本に招聘。もぐさ製造に関する技術研修を受ける。
- 2004年** ・ネパール・スタディツアーを実施して、海外ボランティア活動を体験学習し、ネパール社会への理解を深めた。
- ・日本大使館や当協会の協力を得て、カトマンズ市郊外のチャランケル村に建設された「クリニック兼もぐさ工場」が竣工し、新たな活動の拠点として始動した。
- 2009年** ・ビシャール・シュレスタ氏およびイスワル・ラズ・バラミ氏を日本に招聘して、技術向上のための研修およびネパールの鍼灸治療の現状報告会を行った。
- 2013年** ・専門家の現地での指導に関する渡航費用・滞在費の支援を終了した。

## 2 「ティテパティよもぎの会」の活動

### 「ティテパティよもぎの会」とは

「ティテパティよもぎの会」は、ネパールに東洋療法である鍼灸・マッサージ治療を普及し、ネパール人の健康回復に寄与するために、1992（平成4）年に設立されたNGOです。ネパール赤十字カトマンズ支部から、赤十字の敷地提供の提案があり、鍼灸技術者養成学校（OTTC・東洋医学専門学校）の建設と運営がしだいに具体化されていきました。そして、同校の運営を主導する畑美奈栄氏の知人を中心に、彼女の活動に賛同する人々が集まり、活動の資金援助を目的とした「ティテパティよもぎの会」が1992年6月に発足しました。



OTTC（東洋医学専門学校）の前に立つ畑美奈栄さん（1994年9月）



ネパールで好評のよもぎパンとあんぱん



アマヘルスキャンプを手伝ってくれた  
ボランティア鍼灸師（パタン市）



ヘルスキャンプ（地方巡回治療）の様子  
（カトマンズ市内、1998年5月）



## 〈主な活動内容〉

### ① 第1期プロジェクト——OTTC（東洋医学専門学校）の設立

OTTC（Oriental Treatment cum Training Center／東洋医学専門学校）は、ネパール人に東洋医学の鍼灸、マッサージの技術と、西洋医学の基礎知識、日本語などの語学など、さまざまな知識を教える学校です。また、併設の治療院での実習や、近郊の農村などへの巡回治療奉仕、治療に使うもぐさづくりなど、経験を積むための実践の場も豊富にあり、ここに通う生徒たちは3年間のカリキュラムのなかで、さまざまなことを学びながら、自分たちの将来のための基礎づくりをしています。

OTTCの活動と、東洋医学の効果は、ネパール国内でも大変な反響を得ており、ネパール政府の要人をはじめ、さまざまな方がこの活動に賛同されています。また、1997年7月、同校はネパール赤十字カトマンズカトマンズ支部に運営が移行され、ネパール人による自主独立を果たし、現在まで数多くの優秀な卒業生を国内に送り出しています。

### ② 第2期プロジェクト——ヘルスキャンプの実施

「ティテパティよもぎの会」は1997年、ネパール社会福祉省に登録され、国際ボランティア団体（INGO）として認可されました。同会は、これまでにOTTC卒業生とともに無医村への無料巡回治療を70回以上実施し、10万人以上の患者を治療しています。そして治療を受けた村と患者の多くから感謝され、再度の巡回治療実施の要望が数多く寄せられています。

朝まだ早いうちにカトマンズの事務所を出発し、巡回治療に行く先々では現地ボランティアや地元住民が準備を行い、ヘルスキャンプスタッフが到着する頃にはすでに村人が集まり、治療を待っています。患者さんの症状は多様なため、多岐にわたる鍼灸の

知識が必要となります。そこで、現地鍼灸師に具体的な症例を示しながら実地研修を行い、フォローアップ教育をしています。また、ヘルスキャンプを行うにあたっては実施地区のボランティアと何度もミーティングを開き、アシスタントとして活動するボランティアに“もぐさ”についての講義やお灸のトレーニングも行っています。

治療の灸に使用するもぐさの100パーセントは、ネパールに自生するもぐさで、ネパール人によって育てられたものを使っています。ネパールでは雑草として扱われていたよもぎを、医療品として認識されるまでに高めることができました。ティテパティよもぎの会では、ネパールに自生するよもぎを使用したさまざまな製品の開発も行っています。

今後は中国、日本に次ぐ世界第三番目のもぐさ生産国にするべく、ネパール人に対するもぐさ製造技術の指導と鍼灸師の育成に尽力するため、もぐさ工場兼クリニックも建設しました。また、主だった産業の少ないネパールで、障害を持った人々や女性にも雇用の機会を与えるために、もぐさを使用した簡単な治療法のトレーニングを行い、出来上がったもぐさを日本にも輸出しています。

### 3 アネコット村への支援

首都カトマンズの東北約70キロメートルの地点にあるバグマティ県カブレ郡アネコット村。ここは主にチベット系のタマン族が生活する標高約1,000メートルの山村です。この村に当協会は援助活動を行っています。

この村で農業を営むクリシュナ・バハドール・タマンさん。タマンさんは1974年8月に国際ロータリーの支援で来日し、青森県と秋田県を中心に研修を受けました。ここで一年間、野菜栽培管理、水稻収穫技術、畑作物収納貯蔵、各種果樹類剪定、蔬菜育苗などの実習、さらに肥料、農薬、





アネコット村のタマンさん宅の屋上でRODA役員とタマン夫人(中央)が記念撮影



アネコット村のシュリカリカ小・中・高等学校



完成したもぐさ工場兼クリニック

農機具の扱い方なども学びました。

タマンさんはユースホステルを宿舎としていましたが、その管理者は小川<sup>ちかこ</sup>親子さん(秋田県横手市出身)です。タマンさんは奥さんを病で亡くして、4人の子供がいました。親子さんはタマンさんの帰国後ネパールに旅立ち、アネコット村でタマン夫人となり4人の母親となりました。

タマンさんは帰国後、日本で学んだ知識・技術を生かし、家族とともに米やヒエ、トウモロコシのほか、さまざまな野菜の作付けを増やしていきました。また国際ロータリーの支援を受け、アネコット村で灌漑施設や水源地から1,000メートルの飲料用パイプを敷設しました。これらの施設により、稲を2回収穫し、そのあとに野菜を作付けするという三毛作までできるようになりました。タマン夫妻は、ネパール国内やインド、ブータンにまで出稼ぎに行くなどをして、農業施設や道路建設の資金を調達しました。村では農業技術のみならず、土地争い、水争いなど、さまざまな問題の解決にタマンさんを頼るようになり、現在ではなくてはならない指導者となっています。

## [2] もぐさ工場兼クリニック、 無料巡回治療への支援

### レポート

## もぐさ工場兼クリニックの 竣工式典を挙

(2004年4月)

ティテパティよもぎの会は、当協会ならびに日本政府の「草の根無償援助」をはじめ、団体・個人からの支援と協力を得て、カトマンズ市郊外チャランケル村に「もぐさ工場

兼クリニック」を建設し、2004年4月25日に竣工式典を挙行しました。

式典には、ネパール大蔵大臣プラカシ・チャンドラ・ロハニ氏、駐ネパール神長善次大使をはじめ、ネパール人関係者および当協会から廣池英行理事、木下廣太郎理事、白木和彦評議員、望月雄二評議員と日本からの支援者が参加して盛大に執り行われました。

ティテパティよもぎの会は、この施設を拠点にして女性や軽度の身障者を雇用して第三期事業である「もぐさ」の製造を行い、ネパールが中国、日本に次いで世界第3番目のもぐさ生産国になることをめざしています。併せてクリニックを開業し、巡回治療で完治しなかった患者や地元住民の治療を行っています。なお、本事業は、ネパール人が自主運営できるように援助体制を強化して進めています。

#### 〈施設の概要〉

場所：チャランケル村（カトマンズ市の西南約15km）

土地：約600㎡

建物：鉄筋コンクリート3階建360㎡

1階：もぐさ工場／2階：クリニック／3階：会議室

### 「ネパール・スタディツアー」感想文

## ネパールでの 無料巡回治療に参加して

(2004年2月)

加藤 智美 (財団法人モラロジー研究所)

2004年2月、ネパールで鍼灸治療を続ける国際NGO「ティテパティよもぎの会」のヘルスキャンプ(以下、HC)に参加しました。このHCは、医師のいない村を訪れ、無料で治療を行うというもので、1998年から年に10～12回の割合で行われており、今回で69回目です。今回のキャンプ地は、首都カトマンズから車で1時間弱のところにあるダチ・バ



建物内の治療用ベッド



神長善次大使から建物の目録を受け取るイスワル・ラズ・バラミ氏(左)





ドラバスという地域で、私たちは毎朝5時に起床し、約1時間かけてキャンプ地へ行き、7時頃から午前中の間は治療を行いました。

現在、ネパールの大都市に病院はありますが、地方にはまだまだ無医村が数多く点在し、栄養不足や不衛生な環境により、病気にかかる人が多いそうです。しかし、村から病院までの道のりは遠く、高額な治療費もかかるために、症状をそのまま放っておいてしまう人も少なくないといえます。実際に今回のHCでも、痛みや症状が数年前からずっと続いているという人がたくさんいました。

HCでは、私は患者さんの誘導を行いました。鍼灸師の方々は、患者さんの体の赤ペンで記したツボにお灸をすえていたのですが、患者さんが増え、診察を待つ人が増え始めると、私の中にある感情が生まれてきました。

それは、何もしてあげられないことに対するもどかしさです。

鍼灸資格のない私は、鍼灸師の方々が別の患者さんを診ている間、「エクチンパクス（ちょっと待ってくださいね）」と言って、患者さんの体が冷えないよう、体にバスタオルをかけたり、灸ポット（火のついたもぐさを乗せた陶器のお皿）を乗せ、痛み

を訴える患部をさすりながら、ただただ待つことしかできなかったのです。

“もし自分が鍼灸師の資格を持っていたら、もっと多くの方々の治療にあたることができるのに……”“せめてネパール語が使いこなせれば、患部から離れた場所に鍼灸を施すことに不安を抱く患者さんに、その理由を説明し、安心してもらえるのに……”

そんなもどかしさを感じる一方で、たくさんの喜びや驚きもありました。

このHCへの参加が決定した際に、「これだけは覚えてきてください」と渡された、HCで使う用語リストとネパール



語の初歩単語&会話リストを、私は必死で覚えました。しかし、発音を表すカタカナの文字を覚えていただけだったので、実際に現地で使い始めたときには、微妙な音の違いから、通じないことや聞き返されることが何度かありました。

それでも“なんとか通じないものか”と、自分の周りで飛び交うネパール語の発音を聞き、その音を真似しながら一生懸命話そうとする私の前には、私の拙い言葉を理解しようとしてくれる、スタッフや患者さんの姿がありました。

そのやりとりを続けていくうちに、“なんとか伝えよう”というこちらの気持ちと、“なんとか理解しよう”という相手の気持ちが歩み寄ろうとしていることに気づきました。私は、お互いの心が歩み寄ることによってようやく言葉が通じたとき、そこに喜びや安心が生まれ、さらに互いの心も一歩近づけるのだということを実感し、「歩み寄りの心」の大切さを感じました。

また、次のようなこともありました。HCの最終日、私は終了時間の間に、長年手に力が入らないという年配の女性にお灸をすえるお手伝いをしました。お灸をすえ終わり、「シッディヨ(これで終わりです)」と伝えると、その女性は私の手をぎゅっと握り、(ネパール語で)「こんなに力が入るようになったの! とってもうれしいわ。ありがとう、ありがとう」と言い、私たちスタッフに手を合わせて何度も何度もお礼を言いながら帰っていきました。

私はこのHCで、症状が軽くなり喜んで帰っていく患者さんの姿を数多く目にし、「ティテパティよもぎの会」会長の畑美奈栄先生が「十本の指と少しの医療器具さえあれば治療ができる」とおっしゃるとおり、東洋医学というもののすばらしさを目の当たりにしました。

今年(2004年)の4月でこのHCは終了し、現在はおぐさ工場に併設されている鍼灸クリニックで治療が続けられています。ネパールの大地で、このすばらしい活動が広がっていくことを願い、今後もこの活動に協力していきたいです。



## コラム

### 驚異のよもぎパワー

(2006年7月)

畑 美奈栄 (「ティテパティよもぎの会」会長・鍼灸師)

ネパールのもぐさ工場では、もぐさが出来る過程で不要になったよもぎの粉が毎日たくさん出てきます。あまりに量が多いため、よもぎ風呂として活用するにも限界があり、捨てる場所に困っていました。

そんなとき、その粉を畑に捨てるようにしました。そしたらなんと、荒地のため、貧弱な野菜しか出来なかった畑から立派な作物が出来るようになったのです。

昨年、秋植えの種を蒔こうと土を掘り返してみると、たくさんのミミズが出てきました。中には小指くらいの太さの丸々と太ったミミズもいました。

土壌専門家や農業専門家が見学に来られ、「ミミズは糞をするので、それが土壌改良に非常に良い」と言われました。また別の専門家は「ネパールに来て、これほど柔らかい土を踏んだのは初めて、本当に良い土だ」と感心しておられました。

さらに作物には害虫も付かず、雑草もほとんど生えてきません。今、畑ではカリフラワー、エンドウ、ソラマメ、高菜、ほうれん草、大根、ジャガイモ、サツマイモ、蒔、ミョウガ、フキノトウが収穫出来る予定です。出来た野菜は有機栽培野菜を販売しているお店に置かせていただき、売り上げ(微々たる額ですが)はスタッフの昼食代の補助にしています。

そしてもう一つ驚きの発見があります。昨年12月から今年2月初めまでは霜が降り、屋根の上や土も白くなりました。しかし、周りの家の畑には霜が降りているのに、うちの畑には霜が降りなかったのです。これは、もしかするとよもぎの「保湿保温作用」の効果かもしれません。

これから毎年5,000kg以上の粉が出るので、それを市場に出すことを計画しています。手始めに、有機栽培に10年以上取り組んでいる農場に無料で提供し使っていただくことにしました。今年から直売所で週2回「有機肥料よもぎパウダー」として販売してもらうこととなります。まだ月に50kgほどの販売量ですが、捨てる場所に困った結果として思わぬ効果を発見し、まさに「捨てる神あれば拾う神あり」とはこのことではないかと思っています。

## コラム

## 現地鍼灸師の育成と巡回治療を進める (2011年6月)

木下 廣太郎 (麗澤海外開発協会常務理事)

ネパールは2008年に立憲君主制から連邦民主共和制に政権が変わり、共産党が実権を掌握しました。しかし、いまだに新憲法が制定されず、政治の混乱は続いています。一人あたりのGDP(国内総生産)は500ドル以下で、国民の生活は苦しさが増すばかりとなり、日本からのODA(政府開発援助)の予算も削減され、プロジェクトは減少しています。そんな状況にあって主要な道路建設やダム工事は進められています。

当協会では、無医村の住民や経済的に恵まれない人たちの健康回復を目的として、5本の指と簡単な器具で病気治療ができる日本の鍼灸治療を広めるため、日本から鍼灸師を派遣してカトマンズ市にネパール赤十字の協力を得て、「東洋医学専門学校」(OTTC)の設置と運営に協力しています。これまでに数十名の現地鍼灸師を育成し、巡回治療(ヘルスキャンプ)を6年間にわたって実施して延べ10万名の患者の治療を行いました。今年からはJICA(国際協力機構)のシニアボランティアとして日本から鍼灸師が派遣され、ネパール人鍼灸師の指導や患者の治療に従事しています。現在、ネパールで開業している鍼灸・指圧治療院のほとんどは「東洋医学専門学校」の卒業生によって構成されています。

同校は開校して20年近くが経過し、所期の目的は達成してきていますが、最近では経営状態が厳しくなり、授業料や治療費のみで教員の給与や諸経費が十分に賄えなくなり、建物も老朽化して修繕費等の費用も捻出できない状況になっています。このような問題を解決し、今後も継続して運営できる態勢を構築していくために、ネパール赤十字と真剣な協議を重ね、より質の高い鍼灸師を育成するための方策を検討していく必要があると考えています。



### [3] ネパール大地震からの復興への支援

#### ネパール大地震復興支援レポート

## 一日も早い復興を願って (2015年12月)

木下 廣太郎 (麗澤海外開発協会常務理事)

2015 (平成27) 年4月25日にネパールで発生し、9千人以上が犠牲になった大地震から8か月がたちました。壊滅的な被害が出た山間部では道路が寸断したままで、救援物資の輸送が大幅に遅れています。国民の3割近くに当たる約800万人が被災し、学ぶ場を失った子供は約100万人、建物の被害はおよそ90万棟

にのぼりました。復興はなかなか進まず、今もなお250万人の被災者は生活物資の不足で不自由な生活を余儀なくされています。

ネパール政府は、今年度の予算で1,000億円あまりを投じて、住宅の再建などを進めることにしています。しかし、復興を一手に担う政府機関を設立するとしたものの、いまだ責任者も決まらず、宙に浮いたままです。また、いわゆる復興計画のようなものもありません。ネパール政府だけでは資金もノウハウも不足しているのが現状で、引き続き国際社会からの支援により、これからの復興を支えていくことが求められています。

このような情勢の中、新憲法の改正を要求する住民がインドとの国境検問所を9月末に封鎖して以降、必需品の供給量が激減し、燃料や医薬品の不足が深刻化しており、十分な食料や防寒具、医療等が提供されなければ「新たな惨事」が起こる恐れもあります。



地震発生時のカトマンズ市内



カトマンズ市内シタパイラ小・中学校の仮校舎

当協会が支援している「ティテパティよもぎの会」のスタッフが住むカトマンズ近郊のシタパイラ村では、住宅の倒壊によりスタッフの親戚が亡くなり、多くの住宅や学校には倒壊や亀裂があるため、粗末な仮住まいで電気や暖房もなく、不自由な生活を送っています。また、カトマンズ北東60キロのアネコット村では、建物の90パーセント以上が倒壊したため、被災者はトタン小屋や粗末な小屋で生活しています。

当協会では、皆様から寄せられた緊急募金を、下記のとおり、被害を受けた各団体にお届けしました。

1. 緊急募金額：971,000円（個人・団体72件）
2. 募金配布先：ネパール「よもぎの会」／アネコット村



カトマンズ市内の仮設テント



### ネパールでの支援事業報告

## 生徒たちが安全・意欲的に学べる環境づくりを進める

(2017年11月)

吉積 勇人 (青年海外協力隊員としてシュリカリカ高等学校に派遣)

2015(平成27)年4月25日に発生したネパール大地震によって被害を受けたネパールのアネコット村にあるシュリカリカ小・中・高等学校。同校で支援活動を行っている青年海外協力隊(JOCV)から派遣されシュリカリカ高等学校に教員として勤務する吉積勇人氏から、麗澤海外開発協会からの支援事業を含めた「支援事業報告書」(2017年11月25日付)が寄せられました。その概要を紹介します。



手前は、シュリカリカ小・中・高等学校の仮校舎

## 整地によって向上した学校での指導内容



地震復興工事の様相

アネコット村は首都カトマンズから東北へ70キロほどのところに位置し、村人は「タマン」と呼ばれる民族で構成されています。バスは1日に1本で、アクセスには恵まれていません。

シュリカリカ小・中・高等学校（1～12年／全校生徒数250名）は、大地震による被害を受けた後、1年以上にわたって窓もドアも壁もない校舎が存在していました。2016（平成28）年12月に修復工事が始まり、麗澤海外開発協会（RODA）からの支援金により校庭の整地を行いました。それが学校の貴重な敷地となり、子供たちは今までできなかったサッカーを楽しむなど、地域の憩いの場としても機能しています。

整地が行われたおかげで、今まで滞っていた朝礼が再開され、整列指導から国歌指導等、これまで実施できなかった教育活動が可能になりました。国旗を掲揚することで指導内容の質が上がり、朝礼の整列指導によって、教室内でもきちんと並び、順番を待つという習慣が身に付き、子供たちの規範意識にも良い影響が出ています。



シュリカリカ小・中・高等学校を訪問したRODA役員に現状を報告する吉積さん

によって、教室内でもきちんと並び、順番を待つという習慣が身に付き、子供たちの規範意識にも良い影響が出ています。



新築中の新校舎

## 美化活動に対する意識も高まる

ネパールの学校には清掃活動はなく、掃除は汚いものを扱う身分の低い人たちの仕事という意識が依然としてあります。その影響もあり、首都のカトマンズでさえ街中にゴミがあふれています。同校では問題意識をもって以前から清掃活動を行っていましたが、ゴミ箱

を学校に設置したことによって、美化活動に対する生徒の意識がいちだんと向上しました。以前はポイ捨てされていたゴミを拾うだけの活動でしたが、ゴミは捨てずにゴミ箱へ入れるという習慣が定着し始め、校内のゴミが激減したのです。また、自主的に掃除をする日も多くなってきました。



新たに準備したゴミ箱

### 防災教育で日本の避難訓練等を紹介

2017年8月にはJICAボランティアによる防災教育を実施しました。ネパールでは、地震に対する知識や避難方法等に関して教育を受ける機会がありません。避難訓練を実施するにあたり、教員や地域の方たちを対象に日本の避難訓練の様子や地震のメカニズムを紹介しました。その際にプロジェクターは非常に役立ち、効果的な研修を行うことができました。翌日には、ネパール人の教師たちによって避難訓練が実施され、新しいホワイトボードやメガホンは生徒への指導や誘導に大きな役割を果たしました。

\*

このように、これまでの支援によって生徒を取り巻く環境が非常に豊かになり、教育活動の質がいちだんと向上しました。学校の整地に始まり、清掃活動、防災教育、日々の授業支援など、さまざまな温かい支援のおかげで、生徒たちが安全かつ意欲的に学習できる環境が実現されつつあります。今、ここに感謝の意を込めてご報告いたします。



校内を清掃する生徒